

Title	ジョン・ロックの哲学と其経済学説との交渉 (二)
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.9 (1919. 9) ,p.1123(21)- 1158(56)
JaLC DOI	10.14991/001.19190901-0021
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190901-0021">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190901-0021</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

むるであらう。此の如くして彼等は政黨の幹事及び院内幹事の支配に服従せざる可く、而して彼等の責任は憂慮せらるゝが如き一種曖昧なる勢力の發揮に對する保障を與るであらう。彼等は又論ずらく、此の如き腐敗性なる政治的勢力の中心が存在すると想定して、其の勢力が(四)に提唱せらるゝ上下兩院の選舉會に及ぼす所は、茲に唱道せらるゝ比較的大なる選舉團體に及ぼす所と異なる所あらざる可きは視易き道理ではないか。上院をして下院の競争者たらざらしめむが爲、兩院間の職權に相違を設くる主義の必要に就ては、彼等は反對側と同意見であつた。彼等は此の主義をば、庶民院の選舉を基礎とする貴族院の間接代表の性質、並びに全體としての此の方案の特色たる下文に詳述せらる可き他の相違點即ち任期の長き事、異つたる立法權及び財政權、議員數の少なき事等に發見したのである。是等の議論に動かされて、貴族院改革評議會の多數は、地方的區劃によつて結合せられたる庶民院議員の團體の手に貴族院議員を選舉する方案に賛成したのである。(未完)

## ジョン・ロックの哲學と其經濟學說との交渉 (二)

高橋 誠 一 郎

## 三

近世哲學の始祖 René Descartes は思想と現體、心意と物質との對立を和解することを肯定し且つ企圖したり。本質は其存在の爲に他の何物をも要せずして存在する所のものなり。斯くの如き最高無限の意義に於ては神は唯一の本質なり。然るに二個の創造せられたる本質、思维的及び有體的本質、心意及び物質は有限的意義に於ける本質たるに過ぎず。彼等は其存在に對して獨り神の協力を必要とするものなりとの一般概念の下に理解せらる可きものなり。容性、即ち空間を満すの性質及び意識 (extensio 及び cogitatio) は其究竟單一、本原の屬性なり。總て在るものは空間的なるか或は意識的なるかの孰れかなり。即ち是等二個の本原的實位は離接的に關聯す。思想は純正に内的のものにして單に自我に屬し、容性は外

的にして自我に屬するものと何等の類似を有することなし。空間的なものは意識的に非ず、意識的なものは空間的に非ず。心意の自證は單に意識的現體としての人格のそれなり。定體は彼等が其自體に於て空間的存在及び變化の數量的定限を有する範圍に於て眞實なり。總ての物は定體 (corpora) なるか又は、心意 (ments) なるかの孰れかなり。本質は空間的なか若しくは意識的なかの孰れかなり。斯くて世界は *res extense* 及び *res cogitantes* の絶對に相違し、完全に分離せる二個の領域 (*natura intellectualis* と有形界) に分割せらるゝなり。一方に屬するものは、一方に屬するが爲に他より排除せらるゝなり。然れども Descartes の思想に於ては此峻嚴なる二元論の背後に純全なる本質 (*ens perfectissimum*) としての神の概念存するなり。「我意識す故に我存す、*Cogito ergo sum*」の命題に於て思想と現體の兩方面は洵に連結せられたるの觀あるも、而も彼等は單に互に獨立して決定的と爲り得るに過ぎず。若し如何にして自我は容性を有するものと關聯するやとの疑問にして提出せられんか「意識するによりて」と答ふるの外なかる可し、即ち反面より謂へば「之れを拒否するによりて」と謂ふに在るなり。斯くて神の觀念は是等

兩方面の和解の爲に存する唯一のものと爲るなり。兩本質は神によりて創造せられ、而して神意によりて相共に結合せらるゝを得るなり。神の觀念を通じて自我は容性を有するものゝ存在する理證を得るなり。斯くて神は或程度に於て自我と容性を有するものとの結合を有效ならしむるに必要な *Deus ex machina* たるなり。然れども斯くの如き和解は彼が對立の兩方面を交互に他を拒否する兩個の本質又は勢力として定置し、彼等を其最廣なる分離に於て決定せるが故に、殆ど何等の成果をも收むること能はざりき。Arnold Geulincx 及び Nicolas Malebranche の徒は更に満足なる和解を覓めたるも、而も彼等が到達し得たる理論は愈、明確に彼等の出發せる前提の全然拋棄せられざる可らざることを指示するに過ぎざりき。斯くて終に Baruch de Spinoza は此誤れる設想を廢棄し、而して是等兩個の相對立せる元質の孰よりも其本質性を除去したり。Geulincx 及び Malebranche に從へば神は創造者なり、Spinoza に從へば彼は事物の普遍的本質又は本性なり、前者に從へば神は其意志に由りて世界を創造せるものなり、後者に從へば、世界は神の本性より必然的に結果し來れるものなり。隨て一方に容性の形態に於て存在するもの

も、他方に於て意識の形態に於て存在するものも、等しく同一の神的無限の本質なり。而も彼等は兩者の唯一眞個の一致たる可き其自體に於て一なるに非ず。彼等は本質に對して無關係にして、其内に含有せられたる區別に非ざるが故に、彼等が本質に於て一たることは殆ど何等の効果なし。斯くて Spinoza に於てさへ、尙、兩者は全然分離して存するなり。吾人は此離隔の理由を Spinoza 其人が十分に Descartes 哲學の定則を否認することなく、從て其二元論より逸脱すること能はざりし事實に見出すものなり。彼に據るも、Descartes に於けると等しく、思想は單に思想、容性は單に容性にして、形體の本性の或物は獨り形體の本性の或他の物によりてのみ惹起せらるゝと等しく、思想の経過は獨り思想の経過によりて限定せらる可く、而して兩界の分離は物理學に於ける有ゆる唯心的解釋を排斥すると共に心理學に於ける有ゆる唯物論的解釋を拒否するなり。吾人にして若し兩者に對して内部的和解を見出さんと欲せば、斯くの如き抽象力を壓服せざる可らず。對立の方面は其最も峻嚴なる對向に於ても和解せられざる可らず。是を行ふが爲には獨り二個の方法のみ可能なり。即ち觀念的方面若しくは物質的方面の孰れかに

立脚し、他を通じて一を理解し、物質的方面に據りて觀念的方面を説明し、又は觀念的方面に據りて物質的方面を説明するの舉に出づるを得可し。是等兩個の企圖は殆ど時機を同うして實際に行はれたり。一方的唯心論と一方的實體論(經驗論、唯覺論、唯物論)の兩々相並行せる経過は爰に其發達を開始せるなり。

實體論的過程の創始者にして近世に於ける經驗論及び唯物論の父として見る可き者は John Locke なり。謂ふ迄もなく彼が *An Essay concerning Human Understanding* は哲學史上に一新時代を劃するものなり。本書の結構は既に早く一千六百七十年より同七十一年の冬に於て形成せられたるものなるが、其稿成りしは一千六百八十七年即ち和蘭流寓中のことにして、一千六百八十八年一月同國に於て交誼を締したる Jean Le Clerc (Johannes Clericus) が *Bibliothèque Universelle et Historique* に其拔萃を發表せしが、彼が Princess Mary 及び Lady Mordaunt と共に歸國するに及びて初めて出版せられたるものなり(一千六百九十年)。(Coste によりて一千七百年 Amsterdam に出版せられたる佛語譯は Locke 自身の手に成れる追加を有する點に於て原初版よりも完全なるものなり。後年の版本は英譯せられたる是等の追加を登載せ

り。本書の規範版は一千八百九十四年 Campbell Fraser 版なりとす。彼が其大著の完成に向つて進みつゝある間に於て通過し來りたる匆忙變轉極りなき場面は恐らく其獨自無比の價値を増大する上に於て、彼が其青春の目を送りたる學園の幽棲に比し劣ることなき貢獻を致せるなる可し (Locke は一千六百六十八年 Royal Society の一員に擧げられしも、而も寧ろ五六名の友人と其私室に於て討論するを選べるものゝ如く、斯くの如き論議の一よりして彼は其後年に於ける大著の考案に逢著したるなり) 同書 The Epistle to the Reader. 參照。(大英博物館の所藏に係る本書の一部に Locke の友人 James Tyrell 記して曰く「余は余が道義及び天啓教に關して論議の開始せられたる時、其處に集合せる者の一人なりしを想起せり」と)

恰も Descartes が彼の前に爲せるが如く、又 Kant が彼の後に爲せるが如く、Locke は哲學的研究の著手せられ得る以前に於て、其吾人が理解の範圍内に在るや否や、而して吾人の理解力は那邊に迄伸長するやを先づ明確ならしめざる可らずと主張せり。彼は自ら這個の研究を以て自己の眼を見んとするの企圖に比せり、而してそは心意の本性に關與するものに非ずして知識の收得せられたる時、悟性中に生

起する所のものを指示するを以て自ら満足するの事實を吾人に教へたり。Locke は「觀念」なる語を吾人の意識中に存する有ゆる事物に適用するに於て Descartes と一致せり、而して彼が専心従事せる勞務は一般に人間の心意は如何にして觀念に到達するやを發見するに在りしなり (Human Understanding. I. i; Erdmann, A History of Philosophy. Eng. trans. vol. II. 1897. p. 105)。

Locke は其第一編に於て否定的の結果に到達せり。多數の人々は精神が其始源と同時に受理し、而して之と共に此世に齎せる生得觀念 innate ideas ありと想像す。是等の觀念が生得のものなることを證明するが爲に彼等は普く存在し、而して汎く總ての人に就きて正確なりと稱せらる。然れども其然るを是認するも、若し此一般的和合が或他の方法を以て説明し得可しとせば、斯くの如き事實は何物をも立證することなかる可し。而も彼等が事實として之を主張するは誤れり。洵に理論的にも又實際的にも一般に知悉又は承認せられたる根本的命題存することなし。相異なる人民、相異なる時代の例證に徴して、確乎たるものとして普く承認せられたる道德律存せざること明かなるが故に、正に斯くの如き實際的原則

在ることなし。野蠻人の場合は善く之を立證す。Whatsoever is, Is. 若しくは It is imp-ossible for the same thing to be, and not to be. と言へる命題の如く冷く有效なるものとして最も強き主張を爲し得可きものと雖、決して一般的承認を受くることなきが故に、本然の理論的原則亦存することなし。兒童及び白痴は是等の原則に就きて何等の總念を有することなく教養なき人々と雖、亦全然是等の抽象的命題に就きて知るとなし。彼等の抽象的性質は彼等が文明の進歩せる階段に於ける所産たるを示すものなり。是等の人々の意識は單に特殊、有限且つ具體的の觀念及び知覺のみを容るゝに過ぎずして、何等の一般的原则を有するとなし。而して原理の構成要素たる各個の觀念に就きても亦生得のものあるとなし。斯くて Descartes の *ideae innatae* は總て拒否せられて單に *ideae adventitiae* のみ是認せられたり。即ち神の觀念と雖、亦此論證より免るゝことなし、蓋し神の觀念は相異なる人及び種族の間に於て頗る相異せるのみならず、或者に在りては全然缺如たることすら有るが故なり。本質の觀念亦然るを免れざるなり(而も Locke と Descartes との関係に就きては更に細心なる研究を要するものあるも、爰には姑く縷説するとなかる可し。

Geil, Die Abhängigkeit Locke's von Descartes. 1887. 參照)。(Human Understanding. I, ii-iv, Schwegler, A History of Philosophy in Epitome, Eng. trans. 1902. pp. 225-6)

斯くの如き否定的結果は第二編に由りて補充せらる。悟性又は精神は有ゆる其原始的所有を奪はれたり。生時に在りては心意は未だ筆を染めざる一葉の紙 (Tabula rasa) に等しきものなり、何等の記號を有せず、如何なる觀念も存せざる白紙なり。此白紙は經驗即ち完全に受動的なる印象の受容によりて書せらるゝものなり。思惟の對象たる觀念の總ては悉く感覺若しくは内覺又は反省より生起す。即ち經驗其者は二様にして、一は覺官を以て外界の物象を知覺するに因りて發生するもの、而して他は吾人自身の悟性の活動に關する知覺なり。感覺と反省とは獨り之を通じて觀念の光が本來暗黒なる心意の空間を射るの窓なり。或物象が吾人の悟性中に觀念を誘起する力を稱して其性質と言ふ。若し誘起せられたる觀念が之を誘起したる物象の状態に類似する時は、そは本原の性質なり。然るに他方に於て事物の可覺的性質と稱せらるゝものは多くの場合に於て之と異り實に感覺機關に對する一定の關係を示すに過ぎず。後者は事物に存し、前者は吾人

自身に在り。「外界の物象は可覺的性質の觀念を心意に供給し、而して心意は其自體の動作に關する觀念を悟性に與ふるなり」。即ち感覺の觀念は自己以外なる事物の性質の結果にして、反省の觀念は吾人自身の存する状態の結果なり。是等二種の觀念よりして、而して獨り是等のみに依りて、總て吾人の知識は成立す、斯くて理解の範圍は是等のもの及び其結合に限定せらるゝなり(四三)。

是に於て Locke は觀念を分つて單純觀念及び複合觀念の二と爲す。單純觀念は宛も物象の形影が鏡裏に反映するが如く、悟性が全然受動的なる状態に存する間に、外部よりして其上に銘刻せられたるものなり。是等の單純觀念は一部は單一特殊なる覺官を通じて悟性に到れるものにして、一部は二個以上の覺官の結合に由りて吾人の意識に誘致せられたるもの、他は純正單一なる反省力に因由せるもの、又は最後に感覺及び反省力の結合より生起せるものなり。有ゆる知識の基礎たる是等單純觀念の結合に由り複合觀念を構成す。複合觀念は三種類に歸せしむるを得可し。様式、本質及び關係の觀念是なり。第一に様式(Modes) 普通の意味よりは多少相違せる用法に使用せらるゝの觀念とは如何に複雑なるも其内に獨

自に存立するの推定を有するものに非ずして、本質に對する依從若しくは其感染として思料せらるゝ複合觀念を謂ふ。是等の様式は更に二個に區分せらるゝ、一は何等他のものゝ混和なく、單に同一なる單純觀念の變化又は種々なる結合に過ぎざるものにして、他は一の複合觀念を構成す可く結合せられたる數種の單純觀念の合成せられたるものなり。即ち前者は單純様式にして、後者は混成様式なり。第二に本質の觀念とは獨自に存立しつゝある別異特殊の事物を表現するものと思惟せらるゝが如き單純觀念の結合を謂ふ。是等の本質は更に二個に區分せらるゝ、一は別個に存在するが如き本質にして、他は組成せられたる若干本質の集合的觀念なり。吾人は感覺若しくは反省に依りて單純觀念の一定數が不斷に連結せるの觀あるを見出すなり。然れども吾人は如何にして是等の單純觀念が獨自に存立するを得るかを想像することなく、是等の觀念が其中に存立し、是より結果せる一定の實體を想定するの常なるが故に、吾人は之を本質と呼ぶなり。本質は未知の或物にして、單純觀念を吾人に與ふるに必要なる性質を所有するものと認めらる。而も本質は吾人が主觀的思惟の所産たるの事實よりして、そは吾人自身以

外に何等の存在を有するものに非ずと言ふこと能はず。却てこは吾人自身より獨立せる其主型を具へ、客觀的實在を有するの事實に於て有ゆる他の複合觀念より區別せらる。他方に於て他の複合觀念は心意により隨意に構成せられたるものにして、心意以外に之に對應する何等の實在を有するとなし。吾人は本質の主型の何たるかを知らず、而して吾人は本質其者に就きても單に其屬性を知れるに過ぎず。第三に最後の複合觀念たる關係は一の觀念と他との對比に存す。悟性が或物を思料するに際し、其精確なる客體に限定せられずして、恰も其自體を超出し、若しくは少くとも之を超出せるの觀ある、如何にそが或他の觀念に對し適合するやを見んとする一定の觀念を有するを得るなり。關係は心意が一の思料より不可避的に他の思料に導かるゝが如き方法に於て二個の事物を相互に連結せる場合に發生するなり。有ゆる物は悟性によりて關係を生せしめ、相對的なる或物に化成せしむるを得るなり。隨て可能なる關係の總體を列擧すること不可能なり (II. ii-xxxiii; Schwegler, pp. 227-8)

有ゆる一般概念、從て又言葉(固有名詞にあらず)によりて表示せられ、而して定義

に由りて(顯示せらるゝに由るに非ずして)明確ならしめ得可き總ての事物は悉く此複合觀念に屬す。Lockeは大多數の英國哲學者と等しく一般概念に於て内部的、知的結構の外、何物をも見ざるを公言する中世的唯名論の原則を全然採用せるなり。無數の誤謬は言葉が常に一般的なる或物を表示せるものにして、現實なる或物を表示するに非ざるを忘失せる人々の責に歸す可きものなり。斯くてLockeは専ら言語を論じたる第三編を挿入するの必要を認めたり。(第二編及び四編先づ成り、第一及び第三編は後に附加せられたるが如し、Hoffding, A History of Modern Philosophy, a sketch of the history of philosophy from the close of the renaissance to our own day, Eng. trans. 1900, I. p. 380.) 聽者は常に話者の爲せると同一の方法を以て同一觀念を結合せしむるものにして理解し得可きことは言語の目的なり。獨り個々の物象のみ或現實の存在を有すと謂へる非萬有神論的主張と密接なる關係を有するものはLockeが常に無限は積極的の概念にして、有限は消極的なりと做す。Descartes 及び Spinozaの學說と戰へる銳氣なり。彼の意見に據れば事實は全然之と正反對を成すなり、單純觀念は吾人自身より獨立せる過程より結果せるものなるが故に、常に

之に對して現實なる或物が對應せざるを得ず、是等の觀念は模型たるなり。然るに吾人が心意の形像たる複合觀念は主型(煩瑣學者の所謂 *extra rations*)なり、そは之に對應す可き現實なる何物をも有することなし。複合觀念中、有ゆる他のものと相違せる關係に在るものは既述の如く本質の觀念なり。吾人が多數の性質を合一して見出すに慣れたるが爲めなるか、又は或他の原因が作用しつゝあるか、吾人は兎に角是等性質の集合に對して一の支柱を供給することを強要せらる。縱令外部的又は内部的經驗も吾人に這般の概念を與ふることなく、又吾人は之に關し何等判然たる觀念を有せずと雖、猶吾人は之を以て現實なる或物なりと稱せざるを得ず。是に由りて本質の觀念は複合なりと雖、尙一の模型即ち復寫たるなり、固より吾人は吾人の觀念に對應するものゝ何たるかを知らず、吾人は單に之に對して對應する或物の存在することを確信するのみなるが故に容性の觀念の如く十全なるものに非ず。這般の理由に因りて吾人は其本性に従つて本質を分つこと能はず、而も單に其屬性に従つて之を行ひ得るのみ。斯くて彼等は思想力あるものと思ふべきものに分たるゝなり。前者は之を *Descartes* 學派の言ふが如く、

非物質と稱せらる可きものに非ず。即ち彼等も亦物質的なることは可能にして實に彼等の受動性は之をして頗る蓋然的ならしむるが爲なり。*Descartes* 學派の心意に關する他の主張、即ち其本體は思想に存すと做すものも亦同じく誤謬なり。果して然らば必然心意は常住思惟す可き善なるも、斯の如き假定は正に經驗の否定する所なり。分離し得可き性質としての思想は論理的矛盾なくして有體的存在に屬し得るなり(III; Erdmann, pp. 107-8)。

第四編は各種の知識の間に區別を立て、而して知識の限界を定限せり。心意は總て其思想及び推論に於て、其獨り注意し若しくは注意し得る其自身の觀念以外に何等直接の客體を有せざるが故に吾人が知識は單に彼等に就きての關聯に過ぎざるなり。*Locke* に從へば知識は吾人の觀念中の或者の聯結及び一致、又は不一致及び背反の知覺に外ならざるなり。吾人の知識は單に吾人の觀念と事物の實體との間に適合ある限りに就て現實なり。一致若しくは不一致が直接に知覺せらるゝか、若しくは一定の導體の介在に由りて意識せらるゝかに從ひて、知識は直覺的と論證的とに分たる。是等二者の外に之と等しく信仰及び意見より區別せ

られたる他の種類あり。即ち可覺的知識換言すれば吾人以外なる有限的現體の特殊の存在に就きて使用せられたる心意の知覺是なり。事物に關する吾人の知識は可覺的、吾人自身に關する吾人の知識は直覺的、而して神に關する吾人の知識は論證的なり。何となれば神の概念は常に心意の性質を表顯し、而して無限に關する觀念の誘入に由りて擴張せられたる觀念より組成せらるゝに過ぎず。或一個の知識の構成部分が一般概念なりとせば、それは一般的原则なり。而も斯くの如き原則は其特殊の知識より抽象に依りて形成せられたるものにして、是に由りて常に先行せられたるの事實を忘却すること多きに過ぎたり、斯くて吾人は吾人が有ゆる物は其自身に類似するを知るの前に於て、此圓は此圓なるを知るなり。全稱命題の用は誇張し若しくは輕視せらる可きものにあらずして、彼等に關する重要な區別を注意せざる可らず。彼等の或者は吾人の知識に對して何者をも加ふることなし、即ち例へば主位と賓位とが同一なる同一命題若しくは主位の賓位が其内に包有せらるるものゝ一部を成すが如き命題是なり。他は之に反し主位の本性より結論を引き、而して之を以て賓位たらしむるが爲に、吾人に新たなる或

者を教ふるものなり。最後にLockeは科學を分つて三種と爲せり。第一は*Quoniam* (Physica)即ち自然哲學にして事物の知識を意味し、第二は*Practica*(Practica)就中最も重要なるは倫理學にして、善良且つ有用なる事物を取得するが爲に吾人自身の力及び行爲を正しく適用する方法を論ずるもの、而して第三は*Historica*即ち表號の理論にして、是等表號中最も有用なるものは言葉なるが故に、又能く之を*Logic*論理學と稱し得可し云々と(IV, Erdmann, pp. 108-9)。

## 四

以上は是LockeがAn Essay concerning Human Understandingの大綱なり(此書の表題は後世の大多數の英國學者に由りてAn Essay on the Human Understandingとして掲げられたり。是恐らくは其引用を誤れると共に其意義をも亦誤れるものなり。The Human Understandingは人間の心意に對する同義語なり。而してAn Essay on the Human Understandingは心理學上の論文を意味することゝ爲る可し。Bowen, Modern Philosophy from Descartes to Schopenhauer and Hartmann, 1887. pp. 11-12)。而して彼は吾人が感覺及び反省の兩者より受くる單純觀念中、苦痛及び快樂を以て頗る重要なるものなり

と倣せり。即ち身體中には單純なるか若しくは苦痛又は快樂を隨伴せる感覺の存すると等しく、思想又は心意の知覺も亦單に然るか若しくは又快樂又は苦痛、歡喜又は勞苦を隨伴するものなればなり。是等のものも亦他の單純觀念と等しく之を叙述し、若しくは其名目を定義するを得ず。之を知るの道は覺官の單純觀念に於けるが如く、獨り經驗に依る可きのみ (Human Understanding. II. xx. § 1)。事物は單に快樂若しくは苦痛に關聯して善若しくは不善たるなり。「善」とは吾人に快樂を誘起し又は増加し、若しくは苦痛を減少し、或は或他の善の所有若しくは或不善の缺無を取得し又は維持するに適せるものを謂ひ、「不善」とは之に反し、吾人に或苦痛を誘起し又は増加し、若しくは或快樂を減じ、或は又或不善を取得し若しくは或善を吾人より奪取するの傾向あるものを名付く (§ 2)。Locke は此點に於て更に簡潔秀拔なる Hobbes の所説を義解せるに過ぎざるの觀あるなり (Hobbes, Treatise on Human Nature, vii § 3. 參照)。本書は一千六百三十九年の交に起草せられ、The Elements of Law, Natural and Politique. の題下に寫本として流布せしが、一千六百五十年其友人等に由りて Human Nature 及び De Corpore Politico の二部に分ちて出版せられたり。

快樂及び苦痛並に之を招致せる善及び不善は吾人が欲情の廻轉する樞機なり (§ 3)。人間は此世界の能くし得る、最大なる安易、快樂及び變化を以て最も長く其内に彼を保持するを得可き有ゆる種類の事物の夥多なるに外ならざる幸福を取得するが爲に此世界に置かれたるなり (King, Life of Locke 1829, p. 86. 所載日誌、本書は一千八百五十八年 *Robt* 叢書中に翻刻せらる) と謂へるに徴して吾人は Locke が富に關する概念を推知し得可し。或人が或物の現在の享得が之と共に歡喜の觀念を導く可きもの、缺無に由りて彼自身の内に見出したる不安は即ち吾人が「欲望」と稱する所のものにして、そは不安の大小に従つて亦大小あるなり。人間の勤勉及び活動に對し主要なる(縱令唯一にあらずとする) 刺戟物たるものは不安なり。即ち縱令如何に善なる物が提供せらるゝも、若し其缺無が何等の不快若しくは苦痛を隨伴することなく、人は之を缺くも安易にして満足なりとせば、之に對して何等の欲望なく又之を求むるの盡力あることなきが故なり。即ち單なる *vellety* (彼は此語を以て欲望の最低度位を表示す。Hobbes は全然相違せる意味に此名辭を諒解せり、前掲 *Hum. Nat. ix § 5*) 以上に出づることなきなり。欲望は又提供せられ

たる善の不可能性又は不到達性を認むるに由りて不安が癒治せられ、若しくは緩和せらるゝ限り、是に由り停止若しくは滅殺せらるゝなり (§ 36)。

欲望は不安の状態なり、而して生命其者並に有ゆる其享有は永續不可避なる不安の壓迫の下に在りては支持す可らざる重荷なり (H. K. § 32)。有ゆる有意的行動に對する意志を直接決定するものは或缺無せる善の上に定置せられたる欲望の不安なり (§ 33)。我全智なる造物主は人々に彼等自身を保持し、而して其種族を永續せしむるが爲に、彼等の意志を發動せしめ且つ決定せしむ可く、週期的に再現する飢渴及び其他自然的欲望の不安を與へたり。單に是等を以て抽象的に善にして望ましきものと観するのみにては吾人の意志を決定し、而して吾人を驅つて勞作せしむるに足らず (§ 34)。意志を決定するものは最大確實なる善に非ずして不安なり。富の貧に優れるを知るも、而も貧を以て自ら足れりとする時は之より免れんとするの意志を決定することなし。飲酒の健康上將た經濟上有害なるを知るも、而も飲酒欲に對する不安の再現は酒徒を驅つて酒家に入らしむるなり (§ 35)。然らば何が故に不安のみ獨り意志の上に作用するや。第一に不安の除

去は幸福に到る第一歩なればなり (§ 36)。第二は不安のみ獨り現存するが故にして、缺無せるものがその存せざる所に作用するは萬有の本性に背反するなり (§ 37)。第三に意志が善の見解に由りて決定せらる可しとせば無極無終なる上天の歡樂の可能を承認する者は、富、名譽又は有ゆる他の現世的快樂を追求することなかる可きが故なり。然るに經驗に徴して明かなるが如く瑣々たる小事を追求する吾人が欲望の連續的不安を満足するが爲に最大なる善は屢等閑に附せらるゝなり (§ 38)。

嫌厭、恐怖、忿怒、嫉妬、羞恥等の欲情も亦各其不安を有し、從て又意志に影響するも、而も殆ど其何れのものど雖、之と接合せる欲望を伴はざるものあることなし。不安の存する所に乃ち欲望あるなり (§ 39)。遮莫吾人は此世に於て種々なる不安を以て包圍せられ、區々なる欲望に惑亂せらるゝが故に、其中に在りて最も急切なるものが自ら次ぎの行爲に對し意志を決定するの優勝なる地位を有するなり (§ 40)。欲望の唯一の對境は幸福なり。幸福と不幸とは兩極端の名稱にして、其極限の境界は吾人之を知らず、そは眼、視たることなく、耳、聽きたることなく、又思料す可く人

の心胸に入りたることなきものなり。然れども兩者の或度位に就きては吾人は一方に於ては悦喜及び歡樂、他方には苦惱及び悲歎の種々なる實例に由りて銘刻せられたる頗る鮮明なる印象を有す(24)。完全なる幸福は吾人の能くし得る極限の快樂にして、不幸は極限の苦痛なり、而して幸福と稱せられ得るもの、最低度位は之無くんば何人も満足し得ざる程度に於ける有ゆる苦痛よりの安易及び現在の快樂なり。而して快樂及び苦痛は或對象の作用に由り吾人の心意又は身體二つの上に種々なる度位に於て生起せらるゝが故に、吾人の中に快樂を生ず可き適性を有するものは吾人の所謂善にして、苦痛を生ずるの傾あるものは之を不善と稱す。尙又一定度位の快樂を生ずるに適するものは其自體に於て善にして、一定度位の苦痛を生ず可きものは不善なりと雖、そが其同種の更に大なるものと競合する時は往々にして之を爾く稱せざるとあるなり。即ち彼等が競合する場合には快樂及び苦痛の度位も亦當然選擇の目的と爲るなり。従て吾人若し吾人の所謂善不善なるものを正しく思料せんか、其多く比較に存するを見出す可し。何となれば快樂の多少にても大なる度位及び苦痛の多少にても少き度位に對し原因た

るものは善の性質を有し、之に反するものは不善の性質を有するなり(25)。而も確實に幸福の原因たる可く認知せられたる事物と雖、彼等が特殊の個人に取り其幸福の必須なる部分を構成するものとして思料せらるゝに非ざれば必然其欲望を動すとなきものなり(26)。凡そ其何たるかを問はず、總て現在の苦痛は吾人が現在の不幸の一部たるも、而も總ての存在せざる善は如何なる時と雖、吾人が現在の幸福の必要部分を構成し、又は其缺無は吾人が不幸の一部たることなし。若しそが其一部を構成するとせば、吾人の所有に存せざる幸福の無限の度位存するが故に、吾人は不斷且つ無限に不幸なる可きものなり。斯くて有ゆる不安は除去せられて、善の相當なる度位は現在に於て人々を満足せしむるに資するなり。而して普通の享樂の連續に於ける快樂の或僅小なる度位が彼等の満足せしめられ得可き幸福を組成するなり。若し然らずんば、吾人の意志の決定せらるゝこと頗る多く、吾人が其生涯の大部分を有意的に浪費する、かの不善不惡にして明かに瑣末なる行爲に對する餘地なかる可きなり、而して最大の善に對する不斷の意志決定又は欲求に就きて怠慢なることあり得ざるなり(27)。

Locke は「富」に對する欲望を以て名譽及び勢力並に習慣が吾人に自然なるものたらしめたる其他多數の不齊なる欲望と並置して之を「想像的不安」と見做したり。而して更に遠き存在せざる善は若し飢渴其他多數の日常普通の必要並に不時の損害の外、前述せる「想像的不安」にして減退し、更に大なる對象の觀想に確然心意を捧げたりとせば能く直接の善と競合するを得可し。而も這般の觀想に對する障害は更に低き先天的及び後天的欲望の歇むことなき再現なり(§45)。而して正當なる思料に依り、吾人は提供せられたる或善の價值に對し適當なる比準に吾人の欲望を引上ぐることを得るなり。斯くてそは應て又意志の上に作用して追求せらるゝに至るを得るなり。然れども既述せるが如く幸福を求むる努力の第一歩は不幸の境界より完全に脱出せんとするに存するが故に、吾人が一切の不安の完全に除去せられたるを感知する迄は意志は他の何物にも向ふの餘裕を有する能はざるなり、而して吾人は此不十分なる状態に於ては許多の缺感及び欲望を以て包圍せらるゝが故に、吾人は此世界に在りては永く之より釋放せらるゝことなきが如し(§46)。「人は此世界の給與し得る總てのものを有する時と雖、尙、不滿、不安にし

て幸福より遠ざかれるなり」。前掲 King 所載の日記、p. 87)。心意は經驗に徴して明かなるが如く、大多數の場合に於て其欲望中の或者に就き之が決行及び満足を停止するの力を有し、斯くて總てのものは順次に其對象を思料し、有ゆる方面より之を審査し、而して之を他と比較するの自由を有するが故に、多數の不安中次の行為に對し吾人の意志を決定す可きものは其最大にして最緊切なるものなり。爰に人間の有する有ゆる自由は存するなり、而して之を正しく使用せざるよりして總ての失錯、誤謬及び過失を生ずるなり。之を防止するが爲に吾人は或欲望の遂行を停止するの力を有す。Locke は之を以て有ゆる自由の根源なりと做し、爰に所謂自由意志なるものは成立するものと觀たり。即ち此停止の間に吾人は自己が當に行はんとしつゝあるものゝ善惡を審査し、觀察し、而して判定するの機會を有するなり(§45)。吾人自身の判定に由りて決せらるゝは自由に對する制限に非ずして其進修縮減にあらずして其行使なり(§48)。神自身の自由も亦其最善なるものに依りて決定せらるゝを妨ぐるることなし(§49)。幸福に對する不斷の欲望及び吾人を驅つて之に向つて行動せしめんとする壓迫は自由の縮減に非ず(§50)。眞

正堅實なる幸福の慎重にして不變なる追求は自由の必須なる基礎たるなり(§51)。眞の幸福を追求せしむると同一の必要は同一の威力を以て各個の相次げる欲望を停止し、考察し而して其の満足が吾人の眞の幸福と抵觸することなきやを審査するなり(§52)。而して吾人が欲情の制御は自由に對する正當なる進修たるなり(§53)。

然るに人々が此世に於て區々にして相反せる選擇を爲すは彼等が悉く善を追求するに非ざるを論證するものに非ずして、同一事物は有ゆる人に對し等しく善に非ざるが故なり。總ての人が各其追求する所を異にするは彼等が其幸福を同一物に置くことなく、又之に對して同一手段を選ぶことなきを示すものなり(§54)。自由は心意の指導するがまゝに動作し又は動作せざるの力に存するも、而も大多數の場合に於て人は執意の發動を抑止するの自由を有せず、彼は其意志の發動を行はざる可らず。而も尙、人が決意に關し自由を有する場合あり、即ち追求せらる可き目的として遠き善を選択せる場合なり。此場合には彼が其目的物にして眞に善なるや否やを審査する迄之に對し若しくは之に背きて決定せらるゝと

より其選擇の發動を停止するを得るなり。即ち彼にして一度之を選び、而して其幸福の一部と爲りたる時は、それは欲望を喚起し、而して之に應じて其意志を決定し、彼をして其選擇の遂行に着手せしむ可き不安を彼に與ふるが故なり。彼の意志は常に其悟性に由りて善と判定せられたるものに依りて決定せらるゝも、而も彼にして自ら選擇を誤らんか、彼は正に是に由りて生じたる責罰を蒙るなる可し。永遠の法則及び萬有の本性は彼が誤れる選擇と一致するが爲に改變せらる可きものにあらざるなり(§55)。各個の有意的行爲の選擇に際し意志を決定する諸般の不安は一部は吾人の力の及ばざる原因、例へば肉體的苦痛より生じ、他は過てる判定より生じたる誤れる欲望より發す(§57)。現在の善若しくは不善に關する吾人の判定は常に正當にして、外觀と事實とは此場合に於ては必ず同一なり(§58)。而も吾人の欲望は吾人の幸福を形成し又は増加するの必要に従ひ現在の享樂以外に超出し、現存せざる善に向つて心意を馳せしむるなり(§59)。斯くて吾人が幸福の必要部分を形成する所のものに關する過れる判定より、現在の快樂及び苦痛と將來のそれとを比較するに際し、眼前の對象は更に遠隔なるものに比し事實其

形體小なるも却て之よりも大なるものとして思惟せらるゝと等しく、吾人が心意の軟弱狭小なるに因り往々にして誤れる判定を爲すに基き、又は無知及び不注意に因り行爲の結果を思料するに際し過れる判定を下し、或は又事實吾人の幸福に必要なものを然らずと判定するに由りて惑亂せらるゝなり (§608)。吾人は其趣味及び嗜好を教養し、嫌惡す可きものを快適なるものに變ずるを得ると共に又之を行はざる可らず (§69)。徳に對して不徳を選ぶは顯著なる不正の判定なり (§70)。Lockeの所言は彼が特殊の個人に對する外觀的善と對置して真正なる善の客觀的標準を採用せることを示せり、而して兩者の矛盾撞着は獨り慎重なる判断に依りて除去せられ得るなり。物質的欲望を以て終始する後世の經濟學は永く此真正なる善に對する客觀的標準との交渉を失へるなり。

## 五

彼の諸著に散在せる其價值論の間に何等の矛盾を見出すことなくして、之を諒解せんとするは實に難中の難事たるに似たり。Lockeは吾人が富の元本を以て其生活の便宜に取り有用なる物を意味するものと觀たり(前掲 King, p. 84 以下所掲一

千六百七十七年二月八日附日誌)。而して物の内在的價值は單に人間の生活に對する其有用性に依頼するものと做せり (Two Treatises of Government II, v. § 37)。而も「有ゆる物の上に價値の相違を置くは勞働なり。而して或者をして煙草又は砂糖を栽培し、小麥又は大麥を播種せる一瓩の土地と其上に何等の耕作をも施すことなくして共有の状態に委せられたる同一土地の一瓩との間に如何なる相違の存するやを思料せしめば、彼は勞働の投入に由りて加へられたる改良が其價値の遙かに大なる部分を構成するを發見するなる可し」 (§36) と稱し、總て又單に吾人をして或普通の生活資料に就き是等のものが吾人の用に供せらるゝの以前に於て順次經過し來りたる所を溯りて、彼等が其價値の幾許を人間の勤勉より受けたるかを會得せしむ可し。麪包、酒及び織物は日常使用せらるゝ所にして且つ著しく夥多なる物件なり、而も野果、水及び樹葉又は獸皮は若し勞働が是等の更に有用なる貨物を吾人に供給することなかりしならんには吾人の麪包、飲料及び被服たらざる可らざるものなり。即ち麪包が野果以上に、酒が水以上に、而して織物又は絹物が樹葉、獸皮又は蘚苔以上に價値ある所以のものは悉く皆勞働及び勤勉に歸す

可きものなり、其一方は無援の自然が吾人に供給したる食料及び衣料にして、他は吾人の勤勉と苦痛とが吾人の爲に準備したる資料なり、而して或人にして其價值が如何に他を超過するかを計算する時は又、吾人の此世に於て享有する物の價值の最大部分を構成するものは勞働にして、而して原料を生産する土地は殆ど其一部として認めらるゝことなきか、或は精々其極て小部分として認めらるゝに過ぎず、即ち吾人の間に於てさへ、全然自然に委せられ、何等牧養、耕耘又は栽植に依りて改良せらるゝことなき土地は實に事實に於て然るが如く無用地(waste)と稱せられ、而して吾人は其利益を見出すこと殆ど無有以上に出づることなきまでに僅少なるを知悉するなる可し(ホト)と謂ひ、而して又彼は曩に引用せるが如く、人類が英國内に於ける一畝の土地より一ケ年内に受くる利益に比し、亞米利加に於ける同一地味同一面積の土地より受くるものは前者の一千分の一に達せざる可しと説き、然れば土地の上に價值の最大部分を置くものは勞働にして、之なくんば土地は殆ど何等の價值なかる可し、かの一畝の小麥耕作地の所産たる藁、麩、麩包が荒蕪の状態に在る同一地味、同一面積の土地の所産よりも價值大なるは總て皆勞働の結果

なるが故に、吾人は之に對して有ゆる其有用なる生産物の最大部分を負ふものなり。即ち吾人の食する麩包中に算入せらる可きものは、管に耕夫の苦痛刈入及び麥打を爲す者の勞苦及び麩包製造職の汗のみならず、其數頗る多く、此穀物が播種せられてより麩包と爲すに至る迄之に入用にして、總て勞働に歸せしめらる可く、又其結果として收受せられざるを得ざる犁、磨臼、窯又は其他の或器具に使用せらる可き牛を馴らし、鐵及び石を採掘加工し、木材を伐採し組合する者の勞働も亦之に算入せざる可らず。自然及び土地は單に彼等自身に於けるが如く殆ど無價値なる資料を供給するに過ぎず。吾人にして若し麩包の各片が吾人の用に供せらるゝの前に於て之に就きて勤勉が支給し、使用せる物件を探及せば、そは奇異なる目錄と爲る可し、即ち鐵、木、革、樹皮、木材、石、煉瓦、石炭、石灰、布片、染料、藥材、瀝青、釜、兒、帆柱、網及び製作の或部分に對し、勞働者の或者に依りて使用せられたる貨物の、或物を齎せる船舶に使用せらるゝ總ての資料等列舉すること不可能なるか、少くとも長きに過ぐ可きものゝ全部を包有せざる可らざるなり」と論じたり(ホト)。即ち彼は勞働が物の内在的價值を増加し、彼等をして更に人生に有用ならしむるを觀たる

なり。斯くて彼の利用價值と勞働價值とは一致するなり。而して爰に技術及び工業に對する近代人の轉向の哲學的根柢は存するなり(Eucken, Die Lebensanschauungen der Grossen Denker, 1911, S. 362)。而して又茲に私有財産擁護論の根據を見るなり。

然れども物の内在的價值が人生に對する有用性に依頼したるは吾人が其所要以上を領有せんとするの欲望を有せざりし以前又は敗壞若しくは朽腐することなくして保存せらる可き黄金の小片が大肉塊又は穀物の全堆積を價す可きを協定することなかりし以前に屬するものなり(§37)。而して交易行はれ貨幣流通する社會に於ける自然の價值關係は其經濟論(殊に Some Considerations, 1691)に詳かなりと雖吾人は既に「ジョン・ロックスの利子學說」(三田學會雜誌第十二卷第八—九號所載)中に些か其解説を試みたるを以て茲に贅せず。彼が各所に云々せる「自然價值」(natural value, natural intrinsic value, natural market value)は國法の規定以外に立つ價值にして、必ずしも Travers Twiss の言の如く「粗野なる生活狀態(rude condition of life)」に於ける人間を支持するの力を意味するものに非ず(View of the Progress of Political Economy in Europe since the sixteenth century, 1847, p. 87)。彼の所謂自然狀態は社會未生前の狀

態に非ずして國家未生前のそれなること吾人の既に述べたるが如し。而して國家的關係の下に於ける自然價值と法定價值との關係亦同稿及び「ハリファックス卿の貨幣改鑄を中心として喚起せられたる貨幣論争」(其三田學會雜誌第十二卷第十二號所載)に依りて窺知するを得可し。彼は結局法定價值が自然價值を動すの力なきを見たり。斯くて一面に於てマーカンチリストたる彼は又自由學派の先驅を爲せるものなり。人世の十分なる氣力及び眞實に到達するが爲には、國家の限界を劃すること狭小にして、個人の自由を残すこと可及的多大なるを必要とするの觀ありしなり(前掲 Eucken, S. 361)。

吾人の意見に據れば Locke が「人生に有用なること極て尠少にして、單に人々の協定に基きて其價值を有するに過ぎざる」(Two Treatises, II, v. 50)金銀の職能に關する敘述は徹頭徹尾不可解の難題なりと稱す可きものに非ず(此點に關する彼の説明が其哲學若しくは他の經濟學說上の定義の孰れとも一致すること至難なるは Bonar が其著に於て指摘せる所なり、前掲書 pp. 97-8 彼は Locke が一千六百九十一年の Considerations を以て Lowndes 及び其他の法定利子低減論に對する答辯なりと記

せり、同書 p. 86. 恐らくは誤解なる可し。即ち人生に取りて有用なる物件が持續期間短少なるものより成る間は、吾人は本來吾人の所要以上を要求せざりしものなり。而も永續的物件たる貨幣の發見に由りて、人は其所有を無限に擴張し、隨時眞に有用なるも而も朽廢し易き生活支持の資料を取得す可き保證を得んとするの後天的欲望を生ずるに至るなり。彼は其所謂金銀の「耐久性、稀少性及び偽造に適せざる」の性質に過ぎざる其内在的價值を以て自然なるものと見ず、單に之に對して承認を與へたる人々の意向に基くものと爲せり。唯だそは普遍的なるが故に概して(固より例外は多々存す)自然なるものと同一の効果を有するなり (Some Considerations, 1692, p. 30.)。生活の直接必要に對する欲望は本來の自然的欲望なり。貨幣に對するものは習慣が吾人に自然なるものたらしめたる假想的自然の欲望なり。

然れども彼が他の場合に於て如何なる物件内に於ける如何なる良好有用なる性質の存在も其價格を増加することなく又、實に之をして全然何等かの價格を有せしむることなし」と云へるは(同書 p. 82.) 物の内在的價值は人生に對する有用性

に依頼す云々と説けるに對して矛盾せるが如きも、後者は物の使用價值に對して言へるものにして、前者は其交換價值又は價格に關して論じたるものなり。即ち彼は「開く可き鎖器を知らずして其鍵鑰の上に彼の手を置けるなり」。或物件内に於ける或良好有用なる性質はそが夫々相互に對する割合に於て其數量を減少せしめ若しくは其捌口を増加せしむるに由りて其價格を増加するなり (Ibid.)。而して彼が勞働を以て價值の創造者と觀たる其學說と、租税が如何なる方法を以て賦課せられ、又直接何人の手中より徵收せらるゝを問はず、一國の大資源が土地に於て存する所に於ては大部分土地の上に歸著す云々の所論とは必ずしも Twiss の言の如く互に相容れざるものに非ざる可し(前掲書 p. 103-4)。即ち彼は主として人民の給養せらるゝ所のものは又國家が自己を支持する所のものにして、且つ土地に影響すると最も尠少なるの觀ある租税は却て有ゆる他のものに比し地代を低落せしむること必定なるを論じたるも、而も吾人が地代を支拂ふは貨幣未生前の自然を離れたる不平等なる社會的狀態より發生し來るものなり。貨幣の不平等なる分配が之に對する借手を誘致すると等しく、土地の不平等なる分配は之に對

して借地人を齎すなり。即ち借地人の勤勉なくんば土地は其所有者に對し殆ど何等の利潤をも與ふることなかる可きものなり (Some Considerations, pp. 53, 55.)。而して吾人は吾人自身の幸福に關する事項に對し最高の判官たるものにして、從て財富分配に關する事項に於ても亦然らざるを得ざる所なれども、而も前述せるが如く、吾人は往々にして其判斷を過つことあるなり。不平等なる分配状態は吾人が眞の幸福に對する誤れる判斷より來れるものには非ざるか。彼は實に自ら知ることなくして將來の大問題を提起しつゝありしなり。

彼が經驗的心理學的研究は精神生活及び總括的人間存在の新たにして效果ある洞察を開きたり。精神生活が吾人の眼前に解明せられたるは吾人をして更に善く吾人自身を諒解せしめ而して吾人の能力を審査せしめたり、而して人は洞察の發達と共に彼自身及び其環境に對する勢力を同時に取得せるなり (前掲 Eucken, S. 359.)。而して詩人 Pope の所謂「人類本來の研究は人間なるを示したる啓蒙期の哲學に依りて第十七世紀の「經濟論」は第十八世紀の「經濟學」に化感せんとしつゝあるなり。

(一九一九年八月十八日稿了)

### 中立船内の敵貨と敵船内の中立貨 (四)

板倉卓造

七

十八世紀中に締結せられたる諸條約中「自由船自由貨」の原則を認めざる四の例外の中に就き其三までは佛國にして最後の一は英國を其一方の締約國と爲すものなり。即ち(一)一七一六年佛國はハンザ同盟市との間に敵貨は中立船内に於て沒收せらる可きものなりとの一條約を結び(二)此條約は六九年に至りて再び同文の條項を維持して更新せられたり。此更新に就て佛國の爲めに辨ずるものは是れ西班牙王位繼承戰爭及び其後の諸戰爭中ハンザ同盟市が無抵抗に英國の云ふがまゝに服して同盟市に屬する船内に搭載せられたる佛國貨物を英國の拿捕に委したるに對する一種の報復行爲なりと云ひ(三)更に一七七九年佛國がメクシムブルグ國との間に締結したる條約も亦同一の動機に出でたるものなりと説明せ